

# 『新修鷹経和解』の翻刻と解題

秋吉 正博

The Study and Reprint of Shinshû-yôkyô-wage (新修鷹経和解)  
AKIYOSHI, Masahiro

キーワード：新修鷹経和解、新修鷹経諺解、林葛廬、徳川吉宗、昌平坂学問所

## 一 解題

前稿<sup>〔1〕</sup>では、『新修鷹経諺解』を翻刻して解説を付け、『新修鷹経諺解』の成立と関わりの深い『新修鷹経和解』を取り上げた。本稿では、『新修鷹経和解』を翻刻して若干の解説を加えたい。

国立公文書館内閣文庫に収蔵する『新修鷹経和解』の体裁は全一冊、袋綴であり、表表紙・裏表紙・遊紙を除く墨付き四十六丁である。表表紙に外題題箋「鷹経和解 上中下 完」を貼付する。本文は細い字で書かれており、鷹経の各項目の本文に和解の本文を添える形である。鷹経の本文は漢文体の白文であり、半丁九行で一行あたり二十一字を基準とする。和解の本文は鷹経の本文の一行を二行割書きにしたもので、半丁十八行、一行あたり十九字を基準とする。こちらは漢字・片仮名交じりの文体であり、ルビのふられた漢字も見える。また、文中には、誤記の上に付箋を貼付して書き直している箇所や空白になった箇所がある。表表紙に「昌平坂学問所」の印、一丁表に「浅草文庫」、「日本政府図書」の印、巻尾に「昌平坂学問所」、「文政庚寅」の印が捺されている。江戸時代後期は昌平・昌平坂学問所、明治時代初期以降は大学（文部省の前身）、浅草文庫、内閣文庫に伝来したことが分かる。

『新修鷹経和解』は、『新修鷹経』という漢文体の鷹書を江戸時代中期の

和語で解釈したものである。著者は巻首の通り、江戸幕府の儒官、林信如（号葛廬）である。『徳川実紀』有徳院殿御実紀巻六、享保三年五月十八日条によると、江戸幕府第八代将軍徳川吉宗（有徳院）の御座所において、林又右衛門信如が中庸を進講した後、吉宗から「鷹経の和解」を命じられたという。『新修鷹経和解』は林信如によって作成されたが、その現存本は巻尾の「文政庚寅」の印からみて、文政十三年に昌平坂学問所に収蔵され、同じ頃に書写された写本であり、進献本は早くに失われたのであろうと推測されている<sup>〔2〕</sup>。写本の巻首によれば、『新修鷹経和解』は林信如によって述作され、孫の林意によって校正されたという。写本のそこかしこに見える本文の欠字・誤字・判読不明文字は恐らく、元の本を書写した際、虫損等で判読できなかった箇所であろう。この写本は林意によって校正された校正本を書写したものであろうか。

『新修鷹経和解』の稿本・進献本の存在は知られていないが、前稿では、『新修鷹経和解』と同じ国立公文書館内閣文庫に収蔵されている写本の一つ、『新修鷹経諺解』に注目した。『新修鷹経和解』の和解本文と『新修鷹経諺解』の諺解本文を比べてみると、共通する部分がかなり多い。『新修鷹経和解』は、『新修鷹経諺解』との関わりが深いと考えて、『新修鷹経和解』の作成にあたって参照された重要なものとして『新修鷹経諺解』を捉え直した。

群書類従の刊本などに収載されて広く知られた『新修鷹経』は、中世末期以降の写本に拠っている。ほぼ同じ内容の奥書を付した例が多い。『新修鷹経和解』の末尾においても、『新修鷹経』の奥書を引用している。この奥書は、『新修鷹経和解』の作成にあたって参照した『新修鷹経』写本から引き写したものである。その内容は、平安時代初期に嵯峨天皇から主鷹司の官人に下賜したというものである。

『新修鷹経』をめぐる伝承とその考証はいくつかあり、嵯峨天皇やその側近によって編纂された勅撰の書物であるとも、中国で作られて日本に輸入された漢籍であるとも考えられているが、その評価は定まっていない。かつて拙稿<sup>3)</sup>では『新修鷹経』が日本で作成された可能性もあるのではないかと指摘したが、現在は考えが少し変わり、『日本国見在書目録』に所載する漢籍の一つ「新修鷹経三卷」との書名・巻数の一致を重視している。『日本国見在書目録』に見える「新修鷹経三卷」は、平安時代初期の日本で漢籍として扱われていたようであり、同じ書名・巻数で広く知られる『新修鷹経』こそが、海外から日本に輸入された「新修鷹経三卷」と同一の書物か、その影響を受けたものであろうと考えている。

『新修鷹経』の内容の吟味を十分に行なう必要があるが、その写本は中世末期以降のものばかりである。『新修鷹経』の写本以外にその内容や後世の受容の状況を窺い知ることができるものは、『新修鷹経』を和語で解釈した書物である。そのような書物も中世以降いくつか知られている。中世後期の『鷹経弁疑論』<sup>4)</sup>が代表的である。この『鷹経弁疑論』は、『新修鷹経和解』の識語に「新修鷹経上中下以類書及弁疑論再三遂校合了」と記されており、鷹経の本文を校合するために参照されている。『鷹経弁疑論』や『新修鷹経諺解』などは、『新修鷹経』を重視しているにも拘らず、その由来を明確には書き記していない。中世後期の『鷹経弁疑論』、近世中期の『新修鷹経和解』や『新修鷹経諺解』のように、和語で解釈する書物が作成されていることから、どちらかといえば、『新修鷹経』は漢籍として受け止められていることがうかがえるであろう。

## 【注】

- (1) 『新修鷹経諺解』の翻刻と解題（『八洲学園大学紀要』第七号、二〇一一年）。
- (2) 福井保「江戸幕府編纂物 解説編」（雄松堂出版、昭和五十八年）一七〇～一七一頁。
- (3) 『新修鷹経』の構成（『八洲学園大学紀要』創刊号、二〇〇五年）。
- (4) 『統群書類従』第十九輯中（統群書類従完成会、一九七七年）。

## 二、翻刻

### 《凡例》

- ・国立公文書館内閣文庫所蔵『新修鷹経和解』を翻刻する。請求番号一五四—〇二八五。
- ・原本は全一冊、袋綴、縦二十六・六糎、横十七・九糎、墨付き四十六丁である。
- ・表表紙と裏表紙がある。表表紙に貼付された外題題箋には「鷹経和解上中下 完」と墨書される。表表紙の右上には「昌平坂学問所」の印がある。
- ・遊紙が表表紙の次に一丁ある。
- ・一丁表には「浅草文庫」、「日本政府図書」の印、巻尾の四十六丁裏には「昌平坂学問所」、「文政庚寅」の印が捺されている。
- ・丁は一丁表、一丁裏…と数え、（一オ）（一ウ）…と表記した。丁の区切りは鍵括弧で示して丁の末尾に「（一オ）」と付けた。墨付き無しの白紙の半丁は（白紙）（一オ）と表記した。
- ・鷹経本文及び和解本文の割付は原文通りではなく、その改行箇所は示していない。鷹経本文の割付は半丁九行で、一行あたりの字数は二十一字を基準とする。和解本文は鷹経本文の行頭より二字下げ、鷹経本文を二行割書きにした割付で、一行あたりの字数は十九字を基準とする。和解

本文は、掲載誌面の都合上、鷹経本文と同じ二行書きとした。

・鷹経本文と和解本文それぞれの割注の二行書きは、「」で括って一行書きとした。

・鷹経本文は白文のままとした。和解本文の句点は適宜振ったが、読点は振らなかった。

・片仮名は旧仮名遣いを用いた。「エ」と「エ」の使い分けには疑問もあるが、なるべく原文のままとした。

・清濁は原文に拠った。濁点の付け方に疑問のある箇所も多いが、原文のままとした。

・「子」、「井」の表記は文意に従ってそれぞれ現行の片仮名表記の「ネ」、「キ」に改めた。

・特殊な合字は現行の片仮名表記に改めた。

・平仮名の「く」に見える文字で、二文字分の繰り返しを示した疊字である場合は、便宜的に「く」を用いた。

・漢字一文字の疊字は「々」、「々々」等を用いた。

・片仮名の疊字は「ゝ」、「ゞ」、「ゑ」で表記した。

・旧漢字は出来る限り現行書体に改めた。「鹽」、「絲」など一部で原文のままとした漢字もある。

・異体字はその正字に最も近い現行書体に改めた。一部は外字を作成した。

・判読不明な文字は■を用い、和解本文の文字が空白である箇所は□を用いて示した。また、誤字はそのままにしている。該当箇所で諺解等を参照して正しい文字が判明する場合は、傍注を（ ）で括って施した。

・本文の付箋に記されている朱書の文字は「」で括り、その傍に（付箋）と注記した。

・鷹経本文、和解本文の数か所には頭注がある。該当の本文の傍に（※）記号を付して、その項目の末尾に注記を挿入した。

・巻末の道具図、灸穴図は紙幅の都合上省略した。

# 《翻刻本文》

（表表紙の右上「昌平坂学問所」印）

（表表紙 外題題箋）

「鷹経和解 上中下 完」

（以下、翻刻本文。一才の巻頭に「日本政府図書」、「浅草文庫」の印あり）  
新修鷹経和解

奉 官命国学講官 林 信如 述

孫 林 意 校正

〔序ハ緒ト同シ意ニテ書。一大意ヲ絲ノ如ク云ヒノヘタル体ノ文ヲ序ト云ナリ。〕

夫鷹者俊鳥也稟瑤光之精氣生鐘岱之增巢驍材自天雄姿邈世春化為鳩仁也秋至行戮義也食不忘先敬也誅不避強勇也動無遠而不覽物有形而尽見智也成君子之娛樂助庖饌之宰肉以彼一物兼茲衆美（一才）雖同族於羽毛固殊惠而拔萃故孫行人喻忠猛於前支道林賞神俊於後僕每因務隙不廢玩好愛其隨指授以應機任馴擾以効力豈同魯侯之鵠徒費稻粱衛君之鶴空御華軒哉若乃妖寿快性寔有相法調養瘳治非無厥術所以斟酌古今隨類甄別懼覽之者未詳重復示以圖像勒成三卷名曰新修鷹経斯事雖細可以喻大凡厥來者得以觀焉

夫鷹ハ俊逸ノ鳥ニテ瑤光星ノ精氣ヲ請テ鐘岱ト云ヘルニツノ高山ノ巢ノ中ニ生ス。驍才自然ニソナハリサカンナル姿世ニ遙ニスクレ越タリ。春ハ化テ鳩トナルハ仁ナリ。秋ニ至（一ウ）リテ殺伐ノ戮ヲ行ハ義也。食スル時ニ先祖ヲ忘レサルハ敬也。攫搏ニ強キヲモ恐レサケサルハ勇也。動ク時ニ遠レトモ見スト云フナク物形アレハ悉ク見ルハ智也。君子タル人ノモテ遊ヒ樂ト成リ庖厨膳具ノ肉ヲタスク。一物ニシテ如是多クノ美德ヲ兼タリ。類ヲ羽ネアルモノニ同フストイヘトモ誠ニ智惠殊ニシテ群類ヲヌキンテタリ。故ニ前ニハ孫行人忠儀勇猛ノ人ニタトヘ後ニハ僧支遁林神妙ニスグレタルコトヲ称ス。僕勤ノ隙毎ニ翫ヒ

好ムコトヲステズ。指南ニ隨テ機ニ応シ馴擾ニマカセテカライタスコトヲアイス。魯ノ侯ノ鵠ノタ「メ」ニ五穀ヲツイヤシ衛ノ君ノ鵠ノ軒ニノルニ同シカラズ。モシクハ「寿」天ト快精ハ目利シテ相スル法調養ヒ療治スル法無術ニアラス。古今ノ宜キヲクミハカリ類ニ隨テ明ニワカツ。ヨソラクハ此書ヲ見ル人イ「マ」タ不詳ンコトヲ。重ネカサネテシメスニ図ヲ以テシキザンテ三卷トナシ」(二オ)名テ新修鷹經ト云フ。此コト至細也トイヘトモ以テ大ナル道ヲモサトルヘシ。此後ノ人以テコレヲ見ヨト云フ。」(二ウ)

#### 新修鷹經上

「鷹ノ事ヲカキシルセルコトヲ新ニアミヲサムル意ニテ新修鷹經ト名ク。」

#### 形相

「鷹ノカタチスガタヲシルセル段ナリ。」

相者蓋性命之著平形骨吉凶之道平氣貌者也後魏頭祖有言雖人鳥事別至於資識情性竟何異哉孫楚之賦贊其形狀魏取之經述其體例但形相惡而心術善心術惡而形相善者時有焉譬以言信行失之宰予以貌度性失之子羽理既微奧非識量之所及也今略」(三オ)陳法列之于後

相者本性ノアラハル、トコロカタチ骨髓ヲ平ニシ吉凶ノ道モ氣ト貌ニアラハル、ナリ。後魏ノ頭祖猷文帝モ人ト鳥ト事ハ各別ナレトモ質モモノシルコトモ本性モ同事也トイヘリ。晋ノ孫楚カ鷹ノ賦ニハ專ラ形ヲホメ隋ノ魏取カ鷹ノ經ニハ專ラ体様子ヲイ、述ベタリ。シカシナカラ鷹ノスカタカタチハアシケレトモ心ノサトキモアリ。心ハアシケレトモ形バカリハヨキモアリ。タトヘテイハ口ニイフトコロノ言葉ハヨケレトモ身ニ行フニ不足アルハ宰予ノゴトキ人モアリ。形ハサマシクミユレトモ性ノ正キコトハ澹台滅明ノコトキ人モアリ。此理ハ至テフカキコトナレハ智恵推量ノ及トコロニアラザルユヘ大概鷹ノ諸法ヲ「□」述テ左ニカキツラネシト云フ意也。」(三ウ)

#### 相鷹大体法

「鷹ノ善惡ヲ目利スル大体ヲシルセル段也。」

凡良鷹體者欲得魁岩「大者威能凌鳥小者鳥所凌也」遠而視之毛羽如多近而視之毛羽似少骨肉還多前者有胸腹而無羽翼彎如軒「軒者前高」後者以羽翼褻身體如輕「輕者前下詩小雅如軒如輕」繫格上韉之時鸞翥向上為佳若鸞翥向下以肩摩首體是不謂良鷹也 凡醜鷹體者頭小而尖瞳子小露目後溝穴而近頂鼻孔窄而鳴声不美觜小而仰頂細而撓或如曲鉤一翼節骨小翼羽短曲「世号曰鈍羽」腋「四オ」羽起出覆羽乱起而出腰細弱尾本細末広髀短脰細長兩肘相薄兩脚離懸在一於是謂醜鷹也 凡鷹頸仰體俯腰低「雖低不弱也」是謂三段鷹也凡鷹體如蔓菁根上下毛羽俱短如剪是謂蔓菁鷹也如此之徒鳥若近起則捉不能遠逐凡鷹髀脰俱短肘骨屈曲而腰剛是謂鳬居鷹也古人為良今則不可也

スヘテヨキ鷹ハカタチタクマシク大キナランコトヲコノムナリ。大キナルハ諸鳥ヲシノグ威勢アリ。小ハカヘツテ諸鳥ニシノガル、ガ故也。其ノカタチ遠クヨリ見レバ毛ハフカク多キ似テ近ツキテ見レハ毛ハアサクスカキヤウニテカヘツテ骨肉ツキ多キナリ。前ハ「四ウ」胸腹バカリアルヤウニテハネツバサナキ様ニ見ヘソリカヘリアフノキアカルコトクナリ。ウシロハネツバサニテ惣身ヲツ、ミタル様ニテウツムキヲホヘルガコトク見ユル也。格ニツナキタカタ「ヌ」キニノボスル時ハトバイ上ヘムカフヲヨシトス。モシ下ヘムカヘハ肩ニテカシララスルハヨキ鷹トハイワズ。スヘテアシキ鷹ノカタチハカシ「ラ」小クシテトカリヒトミ小サクアラハル。溝穴目ノウシロクビノ方ニ近ツキテアリ。鼻ノ穴スホフシテナクコヘモウルハシカラズ。觜ハ小クシテ上ヘアフキクビホソクシテクハミマガレルハリノ如シ。一ノ翼ブシ骨小ク短クシテマカレリ。是ヲ鈍羽ト云フ。腋羽ハヨコリイテ覆羽ハミダレヨコリイテコシハホソクシテヨハク尾ハ本ホソク末ヒロクモ、ハミヂカクハギハホソク長シ。兩ノヒチウスク兩ノアシアヒハナレタル類一色モアレハ是ヲアシキタカト云」(五オ)フ。スヘテ鷹ノクビ



アフノキタイハウツフキ腰ハタル。タルレトモヨハキニハアラズ。是ヲ三段鷹ト云フ。又其タイカブラネノコトクウヘシタノ毛モ羽モ短クキレルガコトクナルヲカブラ鷹ト云フ。カヤウノ類ハ鳥近クツトキハトレトモ遠ク鳥ヲフコトナリカタシ。又モ、ハギ共短ク肋骨カ、マリマガリテ腰ツヨキハ是ヲカモキ鷹ト云フ。古人ハヨシトスレトモ今ハヨロシ「カ」<sup>(付箋)</sup>ラストスルナリ。

(※) 頭注の付箋に朱書で「ツク」と有り。

#### 相別體法

凡鷹頸者欲大而守靜頂平中高口領俱大擎繫之時頭正与格轄相当如此之徒有快武心也目者欲離翳稍近後淺深小大与體相称眼光清利如明星靜而不」(五ウ) 転視物如対鼻後眼前溝深隴高檐広而透如此之徒情不転移能捉大物亦為寿也故幽明録曰楚王之鷹軒頭澄目遠瞻雲際欲下鵬雛也凡鼻者欲穴大息細緩而且長吻不輒開愁毛不起「愁毛者突金後毛是也」此乃寿相亦鳴聲響高凡背者欲本體末細黑而潤澤上翳似鸚鵡吻上狹下大者下背直而広開若曲撓者上平則龜懼或垂出者並為醜拙但放時不驚情也凡頸者欲長短与體相称其上隆起如卵子偏長者不得通飛樹中偏短者此似鷹非真鷹也凡肩者欲剛厚「二翼節骨」(六オ) 薄而高指与肩俱薄一翼節骨大而高肩与一翼節骨間隆起相經此乃迅飛在一於斯則羽相不合猶不廢少飛縱肩羽有相頭目違理者為體重也凡胸腹者欲広大溢出雖有肥瘦不變恒體骨長而肚竄腹大此乃為寿骨短而腹大者飢易但短命也骨長而腹小者飢難矣能其去就然後可放凡背者欲有溝穴凡翼羽者欲長直如鳩羽側□尾上羽次疎薄末少平可腋羽覆羽重錢羽皆相薄覆如約着羽葉厚勁羽翰如甲不嫌広狹雖有此肩相違者為體重也羽幹方而羽次密者」(六ウ) 好為逆羽者亦體鈍也又凌風羽欲正附翼如有如無或曲附者自然揚出此為醜也凡尾者欲本末俱體而強直「或曰越逸也」承尾柔細而饒蜜如白綿尾魁體而如甲其箭像町像尾者不関吉凶或曰箭像尾者良揚摧而論不必吉也尾幹屈拳而本體末細者不耐迅飛加以每送年弥拙耳凡毛者欲剛蜜鮮淨故傳玄蜀都賦曰青體素羽取其淨又鷹賦曰頸翻二六機速體輕取毛堅背上有光頂面毛潔此寿之相也胸腹斑毛欲広大但老鷹者若斑文欠不廢耳凡臀者欲孔大「俗号為最矢」其「(七オ) 放矢

時好漸拳尾揺動低頭遠放此乃孔大力多之所致也凡腰者欲勁其奔格上時少拳首尾驚翥放時能上飛「上飛謂險飛値上也」此頸相也但劣下飛而亦失物也「下飛謂背險飛下也」腰弱者雖耐上下飛而失物色凡髀者欲長外隆起如甲以手揣之、少内平而筋多髀疾荊骨背大肘毛流靡於後也凡脛者欲體短而如円「鷹鵠法曰脛短」傍視如広前視如細肌皮鱗次有辯積文不論文大小「跌指文欲同此」其薄弱者每經年成偏側之容枯不膩者為寿故孫楚鷹賦曰足若雙枯凡足者欲蹀節大蹀平而枯若肥溢「(七ウ) 而色如地黃者易腫也凡指者欲放節大而間開縮者也大指集格轄三時而正相對小指亦得正立後指本上皮膚薄而柔凡爪者欲本體末細上隆下平黑而潤澤鉤曲大者捉鳥不被奪本末失體鉤曲小者捉鳥好抽脱又集格時易抗幣相羅巢鷹者難知者也但架鷹者捉鳥放毛脚不示人捉鷹人手恒多鳴聲羅鷹者毛羽鮮美色如曬擽恒少鳴聲如以每經年數老幼難了或雖歷三四年毛羽斑文不變脚形亦不改前或班文年年減脚形易側變改多端誰知其機然總言之脚团者」(八オ) 難側偏者易側但雖团脚得瘡必側

スヘテタカノクビハ大ニシテミタリニウコカサルヲコノム。イタバキハタヒラカニシテ中ダカニシテ口ヲトカヒ共大キナルヲコノムナリ。スエツナク時頭モチ正ク直クシテホコタカタヌキト正面ニ相当ル。カヤウノ類ハコ、ロヨクタケキナル也。目ハハシノ方ヲハナレ後ニチカヨリ目ノアサ、フカサ大サ小サ其鷹ノ摠体トツリアヒカナハンコトヲコノム也。眼ノヒカリスミテサヘタル星ノ如「ク」<sup>(付箋)</sup>ヒトミ靜ニサタマリテミダリニ転シウゴカズ。物ヲミレハ正面ニサシムカヘルコトクワキ目ヲフラス也。鼻ノ後眼ノ前ミゾタチフカクウネハ高ク檐ヒロクシテ間スク。カ様ノ類ハ心外ヘフレウツラス也。ヨク大物ヲトリ寿命モ長キ也。ソレユヘ□□□<sup>(例義違)</sup>「□」幽明録トイヘル書ニモムカシ楚ノ文王ノ飼ヘル鷹ハ頭ヲアゲ目ヲス「(八ウ) マシテ雲際ヲ遙ルバル見ヤリテ鵬トイヘルスグレテ大キナル鳥ノ雛ヲトリシトシルセリ。スヘテ鼻ハ穴大キニ息ホソクシツカニシテナカク吻ミタリニ開カス。愁ノ毛タ、ザルヲコノム也。愁ノ毛ハ突金ノウシロノ毛也。是ハ寿命ノ長キ相ナリ。又鳴聲ノ響モ高シ。ハシハ本ノ方アツク末ノ方ホソク色黒クウ

ルホヒツヤアリ。上ノ觜ハアウムノ如ク吻ノ上セマク下タ大キニ下觜  
 スグニシテ広ク開クヲコノム也。モシマガリタハムモノ觜ノ上平カナ  
 ルハカラクノ<sup>(ア)</sup>物ニモヲソル、也。或ハタレイヅルハ何モアシクミ  
 「ニク」<sup>(付箋)</sup>キトス。タ、シアハスル時意ヲトロカサル也。スヘテ頸ハアツ  
 クナガミチカ其惣体トツリアヒカナヒ上タカクヲコリタチ玉子ノ如ク  
 ナランコトヲコノム。長スキタルハシゲリノ中ニ通シ飛コトナラズ。  
 短カスギタルハ鷹ニ似タレモ<sup>(モ)</sup>正真ノ鷹ニハアラス也。肩ハツヨクアツ  
 ク二ノハブシ骨ウス」(九オ)ク高クサシ肩トトモニウスク一ノハブシ  
 骨大ニシテタカク肩ト一ノハブシトノ骨ノ間タカクテアヒヘンコ  
 トヲコノム。是ハトク飛フ。斯ノ一色モアレハ羽ノ相ハアハズトモ少  
 ハ飛フコトヲヤメズ。タトヒ肩羽ハ相ニカナフトモカシラ目理ニチカ  
 ヒタルハ体重キ也。スヘテ胸腹ハヒロク大キニムツクリトハリイテ、  
 肥タルト瘦タルトノ違ハアレトモ鷹ノ本体ヲチガヘズ骨長クワキハラ  
 クボク腹ノ大キナランコトヲコノム也。是ハ寿命長トス。骨短クシテ  
 腹ノ大キナルハ飢ヤスク命モ短キ也。骨長腹小ナルハウエカタク能其  
 ノソレンカソレサランカヲ考ヘテ其後ニ放チアハスヘシ。背ハ溝穴<sup>(ミナ)</sup>ア  
 ランコトヲコノム。ツバサ羽ネハ長クスグニシテ鳩ノ羽ノ如クソハタ  
 チ尾ノ上ニ置ヲコノム。羽ノ次薄ク末少シ。平ナルハヨシトス。ホロ  
 ノ羽覆羽重錢ノ羽ミナウスクヲホフテツ、マヤカニ着タルカコトク羽  
 ノ葉<sup>(ヨウ)</sup>」(九ウ)厚ツヨク羽ノクキ甲ノコトク広モ狭モキラハズ。此相ア  
 レトモ肩ノ相チカヒタルハ體重キ也。羽ノシン角ニシテ羽ノ「ナ」<sup>(付箋)(※)</sup>ミ  
 キヒシキハヨシ。逆羽<sup>(サカバ)</sup>ヲナスハ體ニブキ也。又凌風<sup>(カサハ)</sup>ノ羽ハタゞシクツ  
 ハサニツキアレトモナキ様ニ見ユルヲヨシトス。或ハマカリテツクハ  
 自然ニアガリイツ。是ヲアシ、トス。尾ハ本末トモニアツクシテツヨ  
 クスグナランコトヲコノム。或ハ越逸ト云フナリ。尾ウケハ柔ニコマ  
 ヤカニシテユタカニキビシキコト白キワタノ如シ。尾魁<sup>(モト)</sup>ハアツクシテ  
 甲ノ如シ。箭像町像ノ尾ハヨシアシニアツカラズ。或ハ箭像ノ尾ハヤ  
 、アガリクダクレハ論スルニ必スヨシトゼズ。尾ノ幹屈<sup>(シ)</sup>アカリテ本ア

ツク末ホソキハ迅ク飛ヒガタシ。其ノ上年ヲカサヌルホト次第ニ拙キ  
 ノミ也。毛ハコハクキビシクシテアサヤカニキヨカランコトヲコノム。  
 ソレユヘ晋ノ傳玄カ蜀都ノ賦ニモアホキスカタシロキ羽ネ其ノキヨキ  
 ヲトル」(一〇オ)トイヘリ。又<sup>(音傳カ)</sup>鷹ノ賦ニ「頸」<sup>(付箋)</sup>翻ネ二六アリ  
 テキサシ<sup>(※)</sup>ニシテ体カロシ。取毛堅クセノ上ニ光リアリ。イタゞキヲ  
 モノ毛イサキヨキハ是寿命長キ相也。ムネハラノマダラ毛ハ広ク大ナ  
 ランコトヲコノム。タ、シフルタカハ斑ヲ毛次第ニヘリカクルモステ  
 ザルノミ也。臀ハ孔ノ大ナランコトヲコノム。俗ニ最矢ト云フ。其ノ  
 矢ヲツク時自然ニ尾ヲアゲテウゴカシ頭ヲ「タ」<sup>(付箋)</sup>レテ遠クツクハ孔大  
 ニシテ力多ユヘ也。スヘテ腰ハツヨカラランコトヲコノム。ホコノ上ニ  
 ワシルトキカシラト尾ヲ少シアケテトハイシハナツ時能上ヘ飛。ケハ  
 シク飛テ上ヘ向ヲ云フ也。是勁キ相也。但ヲ「レ」<sup>(付箋)</sup>ルハ下ヘ飛デシ  
 カモエ物ヲトリ失フ。ソムヒテケハシク飛クダルヲ云フ也。腰ヨハキ  
 ハ上ヘモ下ヘモヨクトブトイヘトモ物ヲトリエヌ也。スヘテ髀ハ長ク  
 ソトハサカンニタチテ甲ノ如ク手ニテナヅレバ肉少クウチハ平ニシテ  
 筋多クモ、蔕莉ノ」(一〇ウ)骨ノセ大キニ肘ノ毛後口ヘナヒクヲコノ  
 ムナリ。スヘテ脛ハアツクミチカクシテマロキカ如クワキヨリ見レハ  
 広カ如ク前ヨリ見レハホソキカ如クハタヘカハウロコノナラビタル如  
 クタ、ミカサネタル文アルコトヲコノム也。モンノ大小ヲハカ、ワリ  
 論ゼズ。跌指ノ文モ是ニ同シカラランコトヲコノム也。薄ク弱キモノハ  
 年ヲカサヌルタビニカタヨリソハダツカタチヲ成ス。カレテアブラツ  
 カサルヲ寿命長シトス。ソノユヘニ孫楚カ鷹ノ賦ニ足ハ双「枯」<sup>(付箋)</sup>ノ若  
 クト云イテ兩ノ脛ヲドロノナラビカレタル如キヲホメタリ。足ハクル  
 ブシ大ニ<sup>(アシウラ)</sup>平ニシテカレンコトヲコノム。モシムツクリトコヘ色地黄  
 ノ如キハハレヤスシ。指ハフシヲハナレ大ニシテ指ノ間開キシ、マラ  
 ンコトヲコノム。大指ハホコタカダスキニサルコト三時バカリタゞシ  
 ク相向ヒ対シ小指モ又タゞシク立ツコトヲエタリ。ウシロ指ノ本上ハ  
 皮薄シテ柔也。」(一一オ)爪ハ本アツク末ホソク上ハ隆ク下ハ平ニシ

テ色黒シテツヤアランコトヲコノム。マガ大ナルハ鳥ヲトリテ取ハナサズ。アツカルヘキ爪ノ本トウスカウスカルヘキノ末ハアツクマガリ小キハ鳥ヲトル時鳥抽テニグル也。又ホコニキル幣ヲアケヤスシ。アミ巢鷹ヲ相スルハ知リガタキ者也。タ、シ巢鷹ハ鳥ヲトリテ毛ヲトリ口ニフクミテ人ニ見セシメサズ人ノ手ヲモトリカム。ツネニ鳴声多キナリ。アミ鷹ハ毛羽ネアザヤカニウルハシクシテ色サラシタルガ如シ。ツネニ鳴声少シ。ソレノミナラス年数ヲ「コ」サスル「タ」ビニ老ワカキモシリカタシ。或三四年ヲフレトモ毛羽ノ班文ヘンジカワラス。脚ノカタチモ前ニカハラズ。或ハマダラノ文ハ年々ニヘリ脚ノ形ハソバタチヤスシ。変シカハルコトサマザマナレハ其機ヲシリガタシ。シカシナカラスヘテイエハ脚マロキハソハタチカタクヒラメナルハソハタチヤスシ。」(一一ウ) タッシマロシトイヘトモカユガリアレハ必ソバタツトナリ。

(※1) 頭注の付箋にも墨書で「ナ」と有り。

(※2) 頭注の付箋に朱書で「速」と有り。

相隼鵠法 「ハヤブサヲ相スル法ナリ。」

凡隼鵠者頂欲平背哀厚而曲鼻穴大決有如懸害者小也鼻上皮薄額奢張頸本襪如卵子翼羽広而側背如甲髀大張指踢如十字爪上团下偏腰襪而勁余相与鷹同

スヘテハヤフサハイタゞキタイラカナルヲコノム。背シマリアツクシテマガリ鼻ノ孔大ニサケテカ、レルアナノ如クナルハ雄也。鼻ノ上皮ウスク額ユタカニハリクヒノ本アツクシテ玉子ノ如クツバサハネヒロクシテソハダチ背ハ甲ノ如クモ、大ニハリアシブミ十文字」(一二オ)ノ如ク爪ノ上マロク下ヒラク腰アツクシテ勁シ。此ノ余ノ相ハ鷹ト同断ナリ。(一二ウ)

## 新修鷹經中

### 調養

「ナル、様ニト、ノヘ養フヲ云フ。」

鷹者飢附飽揚之禽也故曹太祖謂陳登況曰鷹性不同調亦須別天性快者本不須調大概懼者調亦難得苟非其人道不虞行故魏収曰察之為易調之實難今稽衆術之異同擇其善者而從焉

鷹ハウウルトキハ人ニツキアクトキハハナレ揚ルトリ也。ソレユヘニ魏ノ曹操陳登ニ謂テ曰ク鷹ノ性色、アリテ同シカラザレバ調フルニモ又シナシナアリテ各別ナルベシト」(二三オ)ナリ。天性快キハモトヨリ調ルニモ不及。大ムネヲソル、鷹ハ調フレトモ其ノ用ヲエガタシ。マコトニ器量ノ人ニアラサレバ其ノ道ハカリ行ハレズトナリ。故ニ後周ノ魏収カ曰ク鷹ノ察シ目利スルコトハヤスケレトモ調ヘ飼フノハマコトニカタキトナリ。今調養ノ術ノ品々ヲカンガヘ其ノヨキモノヲエラフトナリ。

### 養鷹法

凡養鷹者就陽地高燥為構屋作窓使明暖懸隔子陽時則褰陰時則垂中置架懸格帳架前置掌飼床「架床相去間可鷹失不及也」設燈鑪「設灯者為令鷹馴眼及弁暗夜倒懸也」日夜護視更代為之鷹或驚飛下格倒懸不上或脱免旋子日相搏接」(二三ウ) 如斯不救則致殞絶故令人不暫離凡日晴暖繁庭中格負陽炙背有間浴之凡浴者任鷹欲否若鷹情不応體也汚穢則強浴之凡調肥者以馬家兔鼠鷄鷄穴哺之凡切穴者長寸許広半寸而薄「諸稱切穴者皆放之」湛之温湯「四月八月湛之冷水也」以箸攪之十許遍如此五度「每度換湯」然後洗手攪碎之令有沸更換湯令澄淨而緩緩却湯纔留微液側器向日而炙之良久取鳥毛丸如碁子四五許枚糅糒与之「不厭飽也」凡欲入田則前五六日調之若太肥不食者前十許日隔日哺之「或一日或二三日也」凡調瘦者豕兔穴「(一四オ) 者切湛之温湯少之去汁哺馬鼠穴者切湛之温湯以箸攪之而遍換湯二度去汁而哺「馬鼠食塩鹹傷鷹故必濯之也」雞鷄水鳥穴者鸞割胸穴湛之温湯令氣徹而上韞令其啄之「水鳥不必哺又者聽哺雞小鳥鷄者与鷄雀鼠若之餌鳥其哺鳥法鼠鷹同断也」若大瘦者日哺或二過或三過凡巢鷹者勝擊之時漸呼穴旬日以鷄鷄雛投与之「鷄者以鷄鷄雛及鷄小鳥与也」五六度然後着鈴入田放野雞不論鷄雄隨獲則与「鷄者放鷄及雞小鳥或快壯者自摯鳥鷄鷄鈍者不任不可為常之也」已調習然後隨

其肥瘦而飢飽之〔鵠者不胃肥縱雖肥溢不肯為用猶須經年調〕羅鷹者繫着閣屋中〔或說羅鷹日者不可也〕夜一〔一四ウ〕更初繫坐火側終宵不厭熟至明旦午尅更復繫着夜一更亦繫同前如此三日三夜候其馴僂然後裁食繫使着手人間処繫市上最好避塵烟屍等可繫之勿使駭怖也其与穴者用鷄鴝鼠者切湛之温湯少時以其皮裂之即以細繩約結如十字亦湛之温湯令氣徹然後披皮出之以湯灑着而与〔有野心不宥如皆服故令主也〕稍馴之時延呼与食呼数日然後以鷄鳩投与之〔鵠者同巢鷹法〕既熟然後調肥瘦〔調法同巢鷹但鷄鳥不哺〕攣繫

凡ソ鷹ヲ養フハ東南ムキノ高ク湿気ナキ地形ニイエヲカマヘ窓ヲ作りアカルク暖カナ〔二五オ〕ル様ニ隔子ヲカケ陽氣ノ時ハ隔子ヲカ、ゲ陰氣ノ時ハ隔子ヲタレヲロス。其中ニ格ヲヲキホコタレヲカケホコノ前ニ鷹カヒノ床ヲヲク。ホコトユカトノ間ハ鷹ノウチカ、ラサルホドナリ。燈鑑ヲモフク。鷹ニ灯ヲ見ナラハ〔サ〕シメンタメ又ハヤミノ夜ニ鷹ノサカシマニカ、レルヲ見 弁カタメナリ。昼夜カハルカハルマモリ見ヨトナリ。鷹アルヒハ驚キテ格ヲ飛ヒヨリサカシマニカ、リテアガリエズ。アルヒハ旋子ハスシ日々ニ羽ウチス。カクノコトキヤスクハサレハ命ノ殞絶コトヲイタス。ソレユヘ二人ヲシテシバシモ鷹ノソバヲハナレヌ様ニセシムルナリ。日晴暖氣ナルトキハ庭ノ中ノ格ニツナギヒカゲヲヲヒ背ヲアラシム。シハシアリテ水アミセヨ。凡水アミセルコトハ鷹ノコノミ嫌フニマカス。モシ鷹ノコ、ロ体ニ応セズケガル、トキハシイテモ水アミサスルナリ。肥タル鷹ヲ飼ヒト、ノフル〔一五ウ〕ニハ馬豕兔鼠鷄雉ノ肉ヲカフ。肉ヲ切ルコトハ長サ一寸バカリ広サ五分ハカリニシテウスクス。スベテ切り肉トイフハ〔ミ〕ナ如此也。温ナル湯ニヒタシ箸ニテ攪マセルコト十遍ハカリ。四月八月ハヒヤ、カナル水ニヒタス。カタノゴトクスルコト五度毎ド湯ヲカヘ其ノ後手ヲ洗テ右ノ肉ヲツカミクダキ湯ヲニゴラシ又湯ヲカヘテキヨクスマシメシヅカニ湯ヲシタ〔ミ〕少シハカリウルホヒシルヲノコシテウツハモノヲカタフケ日影ヘムケテホシアブル。良ヒサシクシテ鳥ノ毛ヲトリマロメテ碁石ホトニシ四ツ五ツ肉ヲカキマセテコレヲ飼

フ。飽ヲキラヒイトハヌ也。田ニ出ントセバ五六日前ニコレヲ調ヘヨ。モシ太タ肥テ食ラズンハ前十日ハカリ或ハ一日或ハ二日三日ヘダテ、コレヲカヘ瘦セタル鷹ヲ調フルニハ豕兔ノ肉ハ切りテアタ、カナル湯ニシハラクアリテ汁ヲステ、飼フ。馬鼠ノ肉切りテ湯ニヒ〔一六オ〕タシ箸ニテカキマゼルニ遍湯ヲカエルコト二度汁ヲステ、飼フ。馬鼠ノ食物ハシハハユシ。鷹ヲヤブル故カナラズコレヲ濯ナリ。鷄雉水鳥ノ肉ハ胸ノ肉ヲキリサキアタ、カナル湯ニ〔ヒ〕タシ肉ノ氣ヲシテ通り徹セシメタカタヌキニホセ啄シム。水鳥ハ必シモカハズモロモロノ小鳥ヲ哺。鵠ニハ鷄雀鼠ヲカフコトカクノコトシ。鼠ハ鷹ニ同断ナリ。モシ太タ瘦セタル鷹ニハ日、ニ飼フコト或ハ二ト或ハ三度セヨ。凡ソ巢鷹ハアケウツノ時漸、ニ呼カフ。十日バカリ鷄雉ノヒナヲ以テコレヲナゲアタフルコト五六度。〔鵠ハ鷄雉ノヒナ又ハウヅラ小鳥ヲアタフ。〕其後鈴ヲツケテ田リニ出テ雉ニアハス。トリエタル時ハ雌雄ヲエラハスコレヲアタフ。〔鵠ハ鷄雉ノヒナ又ハウヅラ小鳥ニアハス。或ハコ、ロヨクサカンナルハ雉ニモアハス。ニブキモノハアハセズ。常ニコレヲナラハサシムベカラスナリ。〕ステニ調ヘナラハシテ其後鷹ノ肥ヘヤセニシタカツテウヘシメアカシムル也。〔鵠ハ肥ヘタルイトハス。タトヘ肥スキタルトモアヘテ用ヒラレス。ナヲ年ヲコヘ〕〔一六ウ〕テト、ノヘナラハシムヘシ。〕羅鷹ハクラキイエノ内ニツナキ〔或說ニアミ鷹昼ルハヨカラズトナリ。〕夜ハヨヒヨリスヘテ火ノ側ニ坐ス。ヨモスカラモ熟スルニアカス。翌日午ノ刻ニ又ツナギツク。其ノ夜モ又ヨヒヨリスユルコト前夜ニ同シ。カクノゴトクスルコト三日三夜其ノナル、カアラキカヲ考ヘテ食ヲヨキホドニカゲンシカヒスエテ手ニツカシノ人ノサハガシキトコロ市ノ中ニスエルコトモツトモヨシ。塵ケフリ屍ナドアルトコロヲヨケテスユベシ。ヲトロキヲソレシメジトナリ。シ、ヲアタヘバ鷄雉ヲ用ユ。鼠ハ切りテアタ、カナル湯ニヒタシシバラクアリテ其ノ皮ニテツ、ミ細キ繩ニテ十文字ニ結ビユハ又アタ、カナル湯ニヒタシ其氣ヲ通り徹セシム。其後皮ヲトキヒラキコレヲ出シ湯ニ



テス、ギテアタフ。「野心アリテクラハズ。皆クラフ様ニ如此セシム。」ヤ、ナル、時ヨビテ食ヲアタフ。ヨビナラスコト数ケ日ニシテ鶏雛ヲナゲアタフ。「鶏ハ巢鷹ノ法ニ同シ。」(一七オ) 既ニナレ熟シテノチ肥ヤセヲ調ヘツナギスユ。「調ル法巢鷹ニ同シ。但シ「嶋」鳥ヲカハズ。」入田放鷹法

〔田ノ時鷹ヲアハスル法ナリ。〕

凡入田捉鳥或多或少則弊在慣常故殿後非流利好多則弊在効力猥繁終無快理故多与不多隨時折中凡放鷹之後先靜駐馬以目送鷹目記訖後拳鞭馳進未至數步案轡漸迫鷹出草起即走犬令嗅以長葛為經此為鷹獲鳥急執也不則恐犬害鷹也若草深鷹未起下馬呼上〔下馬隨便必為常也〕然後縱犬嗅之若鷹早出(一七ウ) 草集于木赴即察鷹眼所向地之形體遣犬尋鳥越嶮即立岑上遙揚声呼鷹隨犬飛逐若鷹不応更還呼取其鳥疲憊者不必還呼直縱犬噬之得鳥後還呼耳鷹或不待呼自隨犬飛來此是不用撩者与犬經年調習之所致也如斯鷹者察野田形體先放林木中然後走犬閱鳥凡獲鳥哺鷹者先扶鞭於腰〔為鷹觸下馬不見傷也〕取鷹往就清水而先起左膝伸左手加膝上〔或說安座側鳥加左膝令啄〕厭袈鳥頸於翼中与脚加執而以鳥側置令鷹集上以刀字擺胸肉灑水令啄若可重使而猶有肥者割胸穴(一八オ) 攫碎令食不斯之為而經日則令鷹不調其多少者隨鷹肥瘦凡鈴者朝伝夕解不則鷹嚙鈴竿啄倒懸而死凡鵠者左鷹右犬令嗅隨起即放〔縱放難獲橫放易捉〕鵠追入草中下馬漸迫若不得鳥上韉駕馬〔或不必駕也〕使犬嗅之若鳥已疲頓可為犬所噬即案役犬繫候鳥踢起使捉之每獲必与腦〔謂鵠及雜小鳥或不与量宜為之也〕凡得鳥哺鵠者往就清水而坐仍於韉上灑水令啄其多少者亦隨肥瘦〔哺法与鷹同〕若放水鳥〔謂鵠鵠等也〕則跼躬鋤鵠漸迫臨發忽然揚声鳥起即每獲令啄背穴若可哺者折叉攫碎与〔鳩啄田鳥〕(一八ウ) 田鳥亦同之也 凡放鵠者令諸牽犬者能或慎之害鵠不可不量凡カリニ出テ鳥ヲトルコト或ハ多少或ハ少シ。スクナキヲコノベバ常ニナレテヲクレテハセス、ム心ナキツイヘアリ。ヲ、キヲコノベバ力ヲイタシ事シゲキヲキラヒテ快キ理ナキツイヘアリ。鳥ヲトルコト多少キハ時ニシタガヒテヨキホトニセヨトナリ。鷹ヲアハスル後先シ

ツカニ馬ヲトメテ鷹ヲ見送り目ジルシヲツケヲハリテ鞭ヲアゲテス、ム。五六間バカリガホトニテ手綱ヲヒカヘテゼンゼンニチカヨリセマル。鷹艸ヲ出テ起ハスナハチ犬ヲカケテカシメヨ。アサノ緒ノ長キヲ以テ経トセヨ。是ハ鷹ノ鳥ヲトリタラントキ急ニトランガタメナリ。シカラ「ザ」レバ犬鷹ヲ害スルヲアランカトナリ。モシ草深ク鷹タ、(一九オ)ズンバ馬ヨリ下リテ呼アケテ其後犬ヲユルシテカシム。「馬ヨリヲル、コトハ其時ノ便宜ニシタカフ。必常法アラス。」モシ鷹ハヤク草ヨリ出木ニ集バ鷹ノ眼ノムカフトコロノ地形ヲサツシテ犬ヲヤツテ鳥ヲ尋ヌ。サカシキトコロヲコヘ高キトコロニ立テ鷹ヲヨベハ鷹犬ノ方ニシタガヒテトビ逐フ。モシ鷹呼ニヲフゼズンバヨビカヘシトレ。其ノ鳥クタビレツカレハ必ヨヒカヘサザレバタ、二犬ヲユルシテ鳥ヲカマシメテ後ニヨブノミ。鷹呼ハザレドモ犬ニシタガヒテ飛來ルハトルコトヲ用ヒズ。犬ト年ヲヘテ調ヒナラヘルガユヘナリ。カヤウノ鷹ハ野田ノ地形ヲヨク察シ考ヘ先鷹ヲ林ノ中ヘハナチ其後二犬ヲカケ鳥ヲモトムルナリ。鳥ヲ獲テ鷹ニカフニハ先鞭ヲ腰ニハサミ〔馬ヨリ下ル時鷹ノツバサヲキフ〕レテソコネヤブランガタメナリ。鷹ヲ取テ清キ水ノ辺ニツキ先左ノヒサヲタテ左ノ手ヲ膝ノ上ニヲキ〔或ハ說ニ安サシテ鳥ヲソバダテ左ノ膝ニヲキツイバサシム。〕鳥ノクビヲ羽ネ(一九ウ) ノ中ヘツ、ミアシトソヘ取リテ鳥ヲ側ニヲキ鷹ハ上ニ集サシメ小刀ニテ鳥ノ胸ヲヲシヒラキ水ヲソ、キカケテ啄マシム。モシ猶又カハントセバ肥タル鷹ニハ鳥ノ胸ノ肉ヲツカミクダキクラハシムルコトモアリ。カクノゴトクセズシテ日ヲカサヌル時ハ鷹調ヒ習ハズ。肉ノカヒヤウ多キ少キハ鷹ノ肥タルトヤセタルトニ相応セヨトナリ。鈴ハ朝ツケテタベニハトク。シカラサレバ鷹鈴ヲカミ鈴ヘ啄ヲハメテ倒ニカ、リ死スルコトアリ。鵠ハ左ノ方鷹ハ右ノ方犬ニカシメテ鳥ノタツニマカセテアハス。タテニアハスレバ鳥ヲトリガタシ。横ニアハスレバ鳥ヲトリヤスシ。鵠鳥ヲ追テ草ノ中ヘ入ラハ馬ヨリ下リ漸々ニチカヨレ。モシ鳥ヲエザレバタカダヌキニノボセ馬ニ騎リ〔或ハ必

シモ馬ニノラズ。」犬ヲシテカ、シム。モシ鳥スデニツカレテタチマチ犬ニカマレントセバ犬ヲツナギ鳥ノタツヲマチテトラシム。ト」(二〇オ) ルダヒニ鳥ノ腦ヲアタヘカフヘシ。〔鶉ヲヨビモロミミノ小鳥ヲ云フ。必タビゴトニアタヘカフニモアラズ。ヨキホドニ見ハカラフベシトナリ。〕トリヲエテ鶉ニアタフニハ清キ水ノ辺リニツキテ坐シナヲタカダスキノ上ニライテ水ヲソ、ギカケテクラハシ其肉ノ分量ハ鶉ノ肥ヘ瘦ニ相「応」セヨ。〔カフ法鷹ト同シ。〕若水鳥ニアハセバ〔鴛鴦鶯ノ類ヲ云。〕躬ヲク、メ鶉ヲシツメ漸々ニ近カヨリセマリテアハスルトキニ声ヲカク。鳥タチテトリエルタビニ其鳥ノ背ノ肉ヲ啄マシム。モシカフベクンハ肉ヲワケツカミクタキコレヲアタヘヨ。〔田鳥ヲ啄マシムルモ是ニ同シ。〕スベテ鶉ヲアハスルニハ犬ヲ牽ク者ヲ能ツ、シマシムベシ。犬モシ鶉ヲ害スルコトハカルベカラズトナリ。

#### 夏養鷹法

凡毛羽初落時〔謂四月下旬五月上旬也〕選吉日良辰祭醇〔出時亦同之也〕(二〇ウ) 放着小屋中方丈許於陽地構之南向其戸〔懸納為之重以編本〕欲高燥而暖其中置案座以藁藁等為之縫褰以布徑一尺許而円東壁穿小孔〔令不可出鷹也〕孔内置餌閣又屋中置高一許尺石凡哺飼者雜穴与之切濯之於清水葛約束与之其鶉者用燕雀脫毛約束与之或生与之日哺或一度或二度凡掃屋者五六日後為也〔夜把燭掃之或昼以鉤遙掃之蠅蟻慕羶附着余穴為鷹所食還復害鷹故恒掃之也〕其第一羽初落以夕時置浴船日換納水〔降而不納也〕以出屋為限其羅鷹者嗜水〔鶉亦同之〕小器盛水置之餌閣凡掃屋時則視鷹肥瘦肥(二一オ) 則調之太瘦可死則出之繫格旁飼凡毛羽落革第一羽出扱中一寸許時自屋出之〔出諭十許日調鷹肥瘦但鶉者五六日也〕出後手執与羅鷹同凡着鈴繫者能候鷹穴調勻然後為之若肥瘦不調則令鷹喘息致死不可不慎〔夏養者鈴繫時動致見傷故此云爾耳〕

凡鷹ノ羽ネ毛初テ落ル時〔四月下旬五月上旬ヲ云フ。〕吉日ヲエラビ酒ヲソナヘ祭リヲナシ〔小屋ヲ出ス時モ是ニ同シ。〕小屋ノ中ニハナチヲク。小屋ハ一丈四方ハカリニシテ東南ノ地ニコレヲカマヘ戸ヲ南ムキニ

ス。〔カケイレナス様ニ作り本ヲアム也。〕湿氣ナクカハキサハヤカニシテ暖ナルヲコノム。其ノ中ニ架座ヲラク。藁ヲ以テコレヲ作り布ハ、一尺ハカリニテ縫ツ、ミマロクス。東ノカベニ小キアナヲアケアナノ内〔二一ウ〕ニ餌閣ヲラク。〔アナヲ小クスルハ鷹ヲ出ザルタメナリ。〕又小屋ノ内ニ一尺バカリノ石ヲラク。凡ソ飼ヒカフニハ雜ノ肉コレヲアタフ。肉ハ切りテキヨキ水ニテ濯。麻ノヲニテユハヘテアタフ。鶉ニハ燕雀毛ヲヒイテユハヘアタフ。或ハイキナガラモアタフ。一日ニ一度或ハ二度ナリ。小屋ノ掃除ハ五六日ノ後ナス也。夜ハ燭ヲトホラコレヲハラフ。昼ハ鉤ヲ以テ遠クハカフ。蠅アリノ類ナマクサキニツキ肉ニモツクトキ鷹ニ食セラル鷹ニモアシキ故ナリ。第一ノ羽初テヲトサバユフカタ水アミ船ヲキ日々ニ水ヲ入レカフ。雨ノフル日ハイレザルナリ。小屋ヲ出ルマテ水ヲ入ルナリ。羅鷹ハ水ヲコノム。鶉モ同シ。小キ器ニ水ヲモ餌閣ニラク。小屋ヲ掃フ時ニ鷹ノ肥ヘ瘦セヲ見ヨ。肥ルトキハコレヲ習シ調ヘヨ。太ヤセルトキハ死ベシ。外ヘ出シテホコニツナギ療治シ飼ヘトナリ。毛羽ネ落チカハリテ第一ノ羽出テソロヒテ一寸バカリノ時小(二二オ) 屋ヨリ出ス。〔イタスハ十日バカリニ鷹ノ肥タルトヤセタルトヲ調ヘ養ヘシ。タゞシ鶉ハ五六日ナリ。〕出シテ後手ニトルコト羅鷹ト同シ。鈴ヲツクルハヨクミミ鷹ノシ、ト、ノヒタルヲウカガヒテツケヨトナリ。モシ肥トヤセトヲト、ノハザルトキハ鷹イキツキアシク死スルコトヲイタス。夏ノ養ハ鈴ヲツクルトキウゴカシテ鷹ヲヤブルコトヲイタスユヘシカ云フ。ツ、シムベキトナリ。

#### 養雛鷹法

凡雛鷹者置小屋中〔置屋方丈許〕以皮及葎羅像巢棲之高作窓使明勿令得出亦不得見人即嬌鳴凡哺飼者与生穴佳与死穴不好〔馬豕兎龜雉是也但鶉者生雜小鳥也〕七月中旬夜半提取殺氣至鶉鳥立秋後羽翅成浪飛不止傷羽損(二二ウ) 命故須出也龜故繩繫着闇夜中使知拘束執三日可擊使熟与穴勿使瘦又一法者籠中作巢棲之〔作巢同上〕能以節食不飢飢則身體難長飽則膝垂骸異

為醜害其毛羽稍有出籠着絆令其縦體逸飛与食必呼数日然後繫格又上手〔毛羽猶弱擎恐復慎之勿失〕

スヘテヒナ鷹ハ小屋ノ中ニ置ク。小屋一丈四方ハカリナリ。皮ヲヨビコケツタナトヲ以テ巢ノヤウニカタドリコレニスマシム。窓ハ高く作リ明ニセシム。鷹ノ出ザルヤウニセヨ。又人ヲ見ザルヤウニスルナリ。人ヲ見レハ鳴ケバナリ。飼ヒカフニハイキタル肉ヲアタフルヲヨシトス。死タル肉ハヨカラス。〔馬豕兔亀雉等ナリ。但シ鵠ニハイキタルモロミミノ小鳥ナリ。〕七月ノ中旬夜半コロニトラヘトル。秋ノ殺〔二三才〕氣イタリテ鷺鳥ヲ繫ク也。立秋ノ後ハ羽ツバサソロヒテミダリニ飛テヤマス。羽ネヲ損シ命ヲ損スルコトアリ。ソレユヘ小屋ヨリ出スベシ。アラキガユヘニクラキ夜ノ中ニツナニテツナギ鷹ニユハヘツナギシコトヲシラシメトリテ三日スヘベシ。ナレバ肉ヲアタヘヨ。瘦セザルヤウニナスベシ。又一ノ法ハ籠ノ中ニ巢ヲ作りテスマシム。巢ノ作りヤウハ上ニシルセル通りナリ。能クミミ食ヲホトヨクシテウヘシメズ。ウユレバ身体成長シガタシ。アキスクレハ膝タレスネコトニシテ毛羽ヲモソコナヒアシキ鷹トナル。籠ヲ出シテ絆ヲツケバ鷹ノ身ヲ自由ニナサシメ快クトバシメヨ。食ヲアタフルニハ呼びナラスコト数ケ日アリテホコニモツナギ手ニモスヘヨ。毛〔翮〕<sup>（付箋）</sup>ネイマダヨハケレバスユルニモツ、シミテ損ゼザルヤウニナスベシトナリ。〔二三ウ〕

#### 着脚絆法

凡着脚絆者令正擎鷹從背後伝之〔伝旧絆上〕以挾杖自革表挾脚纏本孔指入脚纏末紙牽通若洪難入者用鉄筋也凡縫革者以洗革柔軟為之縫令堅固此至脚纏令少縁繫把末伝脚〔脚纏広一寸五分長二寸繫把長七寸五分鵠脚纏広八分長一寸五分繫把長六寸五分也〕凡截革者置之楯上以一寸五分刀子長短隨鷹割開脚纏本剪裁令如椿葉脚大小也又以刀子穴別脚纏本裏中央以挾杖自革表挾之貫繫把牽繰之又穿脚纏雖末三分許処中央〔鵠者二分許也〕以挾杖自〔二四才〕表向裏繰出脚纏末即裂紙貫孔牽之

脚絆ヲツクルニハタゞシク鷹ヲスヘテ鷹ノ後ヨリフル絆ノカミニツク

ルナリ。挾杖ヲ以テカハノヲモテヨリハゞキモトノアナヲクジリハゞキノスエヲサシイレ紙ニテヒキトラスナリ。モシシブリテイリカタクハクロカネノ「ハ」<sup>（付箋）</sup>シヲモチユ。脚絆ヲヌウニハ洗革ノヤハラカナルニテコレヲツクル。ヌウコトハキビシクカタカラシム。ハゞキニイタリテクツロキヨケイアラシムルナリ。繫把ノ末ヲ脚ニツクルナリ。〔ハゞキノヒロサ二寸五歩長サ二寸繫把ノ長サ七寸五分ナリ。鵠ノハゞキハヒロサ八分長一寸五分ツナキハ長サ六寸五分ナリ。〕革ヲタツニハマナイタノウヘニヲイテ一寸五分ノ小刀ニテ長短ハ鷹ニ相応シテサキヒラ「ク」<sup>（付箋）</sup>ナリ。ハゞキモトヲキリタチテハゞキ先ヲ椿ノ葉ノ形リノコトシ。ハゞキ鷹ノアシノ大小ニ相応スルナリ。又小刀ニテハゞキモトノ裏ニ穴ヲアケ革ノヲモテヨリ真中ニクシ〔二四ウ〕リニテクジリツナギ把ヲツラヌキヒカヘスナリ。又ハゞキヲウカツコトスエ三分バカリ〔鵠ハ二分バカリ也。〕真中ニヲキクジリニテヲモテヨリ裏ヘムケハゞキノ末ヲカヘシダシ紙ヲサキ穴ヲツラヌキテコレヲヒキトラスナリ。

#### 繫鷹法

凡繫鷹者擎鷹人先右側身近格右手執長絆而頭左手不及格三尺許人放鷹隨飛緩拳令旋子通行此鷹集格以左手支格以右繫着於帳前若鷹遙望格飛向者再三牽鞞然後放遣〔鷹或不肯飛向者直就格強令集也〕凡自格下鷹者擬執鷹人先靜心<sup>（作左）</sup>右側身漸進令左肩近格解長〔二五才〕絆以右手中指一纏長絆片頭以左手執脚絆牽貫逼脚右手共牽高擎離格急將去〔若不牽逼絆者鷹斬有羽弱格傷害也〕

鷹ヲツナクニハ鷹ヲスユル人右ヲ先ニシテ身ヲソバタテホコニチカヨリ右ノ手ニテ長絆ノ両端ヲトル。左ノ手ハホコエト、カサルコト三尺バカリナリ。鷹ヲハナツコトハ鷹ノ飛ニマカセコブシヲユルクシモトヲシテトヲリユカシム。鷹ホコニイバ左ノ手ニテホコヲサ、ヘ右ノ手ニテ帳ノマヘニツナキツク。若シ鷹ハルカニホコヲ見テ飛ムカハゞ再三タカサスキヲヒキ其後ニハナチヤル。〔鷹モシ飛ムカハズンハスクニ

ホコニツキシイテイサシムルナリ。」ホコヨリ鷹ヲヲロサバタカヲトラントスル人先ツ心ヲシツメ右ノソバヨリ身ヲゼン々ニス、メテ左ノ肩ヲホコヘチカツケシメ長絆ヲトキ右ノ手ノナカ指ニナカヲノカタハシヲヒトマトイマキツケ左ノ手ニ」(二五ウ)テ脚絆ヲトリヒイテ脚ニツラヌキセマリ右ノ手トトモニヒキ高クスエテホコヲハナチモチサル。〔若シ絆ヲヒキ逼サレハタカキレ羽ネヨワクシテホコニテソコネンコトアラントナリ。〕

#### 鷹法

凡鷹者先鎮鷹令正居臂上〔或説鷹斬者飛位時直以右手捉并兩脚不必待正居也〕擬捉鷹人両手隠袖漸拳進〔為鷹怖人手拳動〕以左右無名指中指各夾捉鷹兩膝節以上以母指各厭左右羽即拳着胸上尾下首移鷹右脚加左右手夾之仍以左手着鷹胸須臾之間令鷹靜息以左手捉屈鷹右脚次以左手母指撰右重錢羽与脚捉〔指不触翼節骨氣衛腹腰等犯之有害也〕(二六オ)又以右手捉屈鷹左脚次以右手母指撰重錢羽与脚捉半既而安座擎持鷹〔或着鷹於兩股間者為劣也〕若欲仰鷹者着胸之後右手捉兩脚左手撰羽尾内首外右廻置兩膝間即以左右母指食指各夾捉兩脚又若可更俯者右手捉兩脚左手撰尾羽左廻着胸〔余法同上〕

鷹ヲフセルニハ先ツ鷹ヲシツメタ、シク臂ノ上ニヲラシム。

或説ニ鷹キレバ飛クライノ時スグニ右ノ手ニテ鷹ノ兩脚ヲアハセトリ鷹ノタ、シクアルコトヲマタストナリ。

鷹ヲトラントスル人両ノ手ヲ袖ノウチニカクシセン々ニ手ヲアケテス、ム。左右ノ無名ノ指中指ニテ鷹ノ兩膝ノフシヨリウエヲ」(二六ウ)サシハサミトリ母指ニテ左右ノ羽ネライトヒ胸ノ上尾ノ下ニアケツク。首ヲ鷹ノ右ニ移ツシ脚ハ左右ノ手ヲソヘコレヲサシハサム。ナヲ左ノ手ヲ鷹ノ胸ニツケテシバシノアイダ鷹ノイキヲシツメシメ左ノ手ニテ鷹ノ右ノ脚ヲトリカ、メ其ツキニ左ノ手ノヲヤ指ニテ右ノ重錢ノ羽ネト脚トヲカネテトルナリ。〔指羽ブシノホネ氣衝ナラヒニハラコシナドニフレサハラザルヤウニスベシ。コレヲヲカセバ鷹ニカヒアルトナ

リ。〕又右ノ手ニテ鷹ノ左ノ脚ヲトリカ、メツギニ右ノ手ノ母指テ重錢ノ羽ネト脚トヲカネテトリアハセ其後安座シテ鷹ヲスエモツナリ。〔或ハ鷹ノ兩ノ股ノアイタニツクルモノヲヲトレリトスルナリ。〕若シ鷹ヲアヲカサセントセバ胸ニツケルノ後右ノ手ニテ兩脚ヲトリ左ノ手ニテ羽ネ尾ノウチカシラノソトヲ右ニマハシ兩脚ノアイタニヲク。則チ左右ノ母指食指ニテ各兩ノ脚ヲサシハサミトル。又若シ更ニフサシメントセハ右ノ手ニテ兩脚ヲトリ左ノ手尾羽ヲカネトリテ左ニマハシ胸ニツクルナリ。〕(二七オ)〔余ノ法ハ上ニシルセシト同断ナリ。〕

#### 着鈴繫法

凡着鈴繫者捉鷹令俯擬着繫人左手執尾右手把錐披掃尾魁着水於毳修撫之若修撫不伏則刈去之後葉於着鈴尾下〔着鈴尾謂尾中央二箇也〕乃伝鳥羽根〔不至膚二分許而伝之也〕即以左手送挾尾下以錐穿鳥羽根離本頭二分処錐苞徹平則緩緩軋抽之貫針於其孔牽出尾外以去針自着鈴尾外以錐本鈎索自葉上出之偏結兩縷逼延之鈎出一縷於尾内左右手各振絲合手緩緩牽鈎〔若不〕(二七ウ)合手牽引者糸断成害也〕乃重紮兩縷結革上孔中間又一紮約結更後偏結乘一許分截去之截革者欲一度断形様令圭頭差殺本頭兩角長以自着鈴尾本至末第二斑文末頭為度以彩色革柔軟為之預先度長短截取置之礎上即以兩釘釘革本頭又以兩釘釘着革末頭於礎外廉仍以五寸刀子先截右革側刀剪外偏正刀剪内偏〔截左革亦准之〕即以一縷絲貫其兩端於訂革本而上二分穿孔〔鶴者分半〕貫針鈎係絲於革摠括之凡造鳥羽根者鷹用第一二三羽根根長一寸四分鶴用鴨等第一二三〔二八オ)羽根長一寸置中央已下削殺中央已上縱折内方凡剪葉者方二寸〔鶴者一寸五分〕用大繭樹葉〔煮而陰乾〕

鈴ヲツケツナグニハ鷹ヲトリフセシメ左ノ手ニ尾ヲトリ右ノ手ニ錐ヲトリ尾魁ヲヒラキ扨ヒ毳ニ水ヲツテヲサメナヅ。ナツレトモ毳フサザレバ刈去ル葉ヲ鈴ツケ尾ノ下ニサシハサム。〔鈴ツケノ尾トハ尾ノ真中ノ二枚ヲ云フ。〕鳥ノ羽ネニツケテ〔ハダヘニイタ「ラ」サルコト二分バカリニシテコレヲツク。〕左ノ手ニテ尾ノ下ニヲクリサシハサミ錐ニテ鳥ノ羽ノ根ヲウガツ。本ノ頭ヲサルコト二分バカリナリ。鶴ハ、苞



平ナル寸ハユルミトコレヲヌキ針ヲ其ノ孔<sup>ア</sup>ニツラヌキ尾ノソトヘヒキ出シメ針ヲ去ル。鈴ツケノ尾ノソトヨリ錐ノ本ニテ糸ヲツリ葉ノ上ヨリコレヲイダシ両ノ縷ヲヒトヘニ結テコレヲヒキノバシ一ノ縷ヲ尾ノ内ニツリイタシテ左右ノ手ニテ各末ヲモチテ手ヲ合テユルミトヒキツ<sup>付箋</sup>。(二八ウ) ツメカサネテ両ノ縷ヲタビシ革ノ上孔ノ中ホドニテムスフ。〔若手ヲ合テ糸ヲヒカサレバ糸キレテ鷹ノ害ヲナス。〕又一ツニハ絲ヲツヰメムスビヒトヘニ結アマシテ一分バカリニテキリサル。革ヲキルハ一度ニ「タ」ツ。ナリ形ハ圭頭<sup>ホウ</sup>ノ如クシ本端ノ兩角<sup>カド</sup>ヲソヒテ鈴ツケノ尾ノ本ヨリ末「第」<sup>付箋</sup>ニノ斑文ノ末端ニイタルヲ度トス。彩色革ノヤハラカナルヲ以テコレヲツ「ク」<sup>付箋</sup>ル。サキニ長ミデカラ考ヘハカリキリトリテマナイタノ上ニヲキ両ツノ釘ヲ革ノ本頭ニクギウツ。又両ツノ釘ニテ革ノ末頭ヲマナイタノソトノカドニクギツケ五寸ノ小刀ニテ先右ノ革ヲタチ小刀ヲソバダテ、外ノカタヲキリ小刀ヲ正クシテ内ノカタヲキル。左ノ革ヲタツモ是ニ同シ。一ノイトスデニテ其ノ兩端ヲクギツケノ革ノ本ニツラヌキ上二分ニ孔ヲウガツ。鶴ハ分ナカ也。釘ヲツラヌキカケイトヲ革ニツリコレヲスベク、ルナリ。鳥羽ネヲツクルコトハ鷹ニハ第一<sup>付箋</sup>二<sup>付箋</sup>三<sup>付箋</sup>ノ羽ネヲ用ユ。根ノ長サ一寸四分。鶴ニハ鴨ナドノ第一二三ノ羽ネヲ用ユ。長サ一寸。ナカホドヨリ下ヲキナカホドヨリ上ヲケヅリソキテタテニ内ノ方ヲ折ル。剪<sup>ル</sup>葉<sup>ハ</sup>ハ二寸四方也。鶴ハ一寸五分ナリ。大モチノ木ノ葉ヲカゲボシニシテ用ユ。

### 攻贅法

凡攻贅者捉鷹令俯擬攻人右手捉贅引伸頸以左手無名指間夾持右手以一寸已下刀子剪齊贅末又開鷹口窄食指削贅傍出者〔古人云而今如羅鷹為不削佳今則為劣也〕側刀子剪拈贅令有潤澤〔刀子不及突金而出有害也但贅末出而無害不可俾攻贅末〕

贅ヲ攻ルニハ鷹ヲトリテフセ右ノ手ニテ贅ヲトリクビヲ引ノバシ左ノ手ノ無名ノ指ノ<sup>付箋</sup>二<sup>付箋</sup>九<sup>付箋</sup>ウ<sup>付箋</sup>間ニハサミモチ右ノ手ニ一寸ヨリ内ノ小刀

ニテ贅ノ末ヲキリト、ノフ。又鷹ノ口ヲ開テ食指ヲ鷹ノ口ニ窄<sup>ハメ</sup>テ贅ノ「ワ」<sup>付箋</sup>キヘイヅルヲケツリ去ル。〔古人之說ニハアミタカハケツラサルコトヨシトス。今ハヲトレリトス。〕小刀ヲソハタテ、キリハラヒ潤澤ニナルヤウニセシメヨトナリ。〔小刀突金ノ方ヘ「ヲ」<sup>付箋</sup>ヨバサルヤウニツカフベシ。突金ノ方ヘ出「レ」<sup>付箋</sup>バ鷹ニ害アリ。タビシ贅ノ末イデタル害ナシ。贅ノ末ヲハヤセムベカラズト也。〕

### 攻爪法

凡攻爪者捉爪令仰攻人以一寸已下刀子剪礪爪末削去爪上擁着令勾好〔爪出而無害不可憚也〕其長隨鷹體耳

攻爪ニハ爪ヲトリテアフノカシメ一寸ヨリ内ノ小刀ニテ爪ノ末ヲキリトギ爪ノ上ヲケツリサリ勾ヨカラシメヨ。ナカサハ鷹ノ恰好ニ応スルノミナリ。〔爪イデタルハ害ナシ。ハ、カルヘカラズトナリ。〕

禁忌法〔鷹ニイミキラフコト也。〕<sup>付箋</sup>三〇オ

右悲為本凶喪之家哀痛斯盛訪之古今不宜應獵凡厥掌飼比預此事不得執擊之イミキラフ内悲ヲ本トス。喪アル家ニハカナシミイタムコトサカンナリ。古今ニ考ルニ悲アル時節獵スベカラズ。鷹匠モ凶喪ノ事アルトキハ鷹ヲトリスユルコトヲ得セシメズ。

### 繫格禁

右鷹之為性良多驚猜繫格之時動致傷害或得其道有時而失凡厥掌飼先正手然後臨架格人不懸帳暫不得繫及目病瘡血痢鷹不可与平鷹同格〔脚有瘡者聽之〕鷹鶴同繫亦禁為有大害小之心也<sup>付箋</sup>三〇ウ

夫鷹ノ性ハ驚キウタガフコト多シ。ホコニ繫ク時ヤ、モスレバソコナヒヤブルコトライタス。ホコニツナクノ道ヲ得レトモ或ハ時々アヤマリウシナウコトアリ。鷹匠先ツ手ヲタビシフシテホコニノゾム。タレヲカケザレバシバラクモツナグコトヲエザレ。目ノ病カユガリ血痢ノワヅラヒアル鷹ハ平生ノ鷹トハ同格ナラズ。〔脚カユガリアルハ「コレ」<sup>付箋</sup>ヲユルス。〕鷹鶴同クツナクコトモ禁スベシ。大ハ小ヲ害スルノ心アルガタメ也。

鷹屋禁

右馴擾之道理令清静喧塵之事尤是可禁凡厥掌飼不得屋内令燎煙燼徹及戲謔

鷹ヲナレカフノ道ハシツカニキヨクナラシメヨ。サハガシクケガラハシキコト尤禁ズベシ。」(三二一オ) 鷹屋ノ内ニス、ケブリフスブルコトナカレ。鷹ヲ飼フモノ鷹屋ノ内ニテタハフレアソブコトナドナカレ。

放鷹禁

右放鷹之道可候前物若鳥未出草鷹已離則翔集之間遇犬見噬凡厥掌飼慎之勿失

鷹ヲハナツノミチマヘノモノヲウカガフベシ。モシ鳥イマタ草ヲイデザルニ鷹既ニハナル、時ハカケリキルノ間犬ニカマル。鷹匠此道理ヲツ、シンテ失フコトナカレ。

吐毛禁

右哺養之道吐毛為要未吐之前先早与穴積漸之後」(三一ウ) 終以傷腠凡厥掌飼可慎戒之但鷹體疲可一日二哺者一二許度不必待吐

鷹ヲカヒヤシナフノ道毛ヲハクヲカンヨウトス。未ハカサルサキニハヤク肉ヲアタフレハツモリテ腠ヲソコナヘヤブル。鷹匠コレヲツ、シムベシ。但シ鷹ノテイツカレテ一日二度カフホドナルトキハ一二度斗ハ毛ヲハクコトヲマタズシテ肉ヲアタフベシ。

拭贅禁

右拭贅之道任鷹進止若鷹未熟習強拏拭杖則贅傍之毛脫落成醜凡厥掌飼宜知此趣未習之鷹臨水而浴」(三二一オ)

ハシヲヌグウノ法ハ鷹ノ進退ニマカスベシ。若鷹ナトジユクセサルニシイテ拭杖ヲアクルトキハ贅ノカタハラノ毛ヌケヲチナミニクキコトヲナス。鷹匠ヨロシク此ノヲモムキヲシルベシ。未タナレシヅクセサルノタカハ水ニゾンテ浴シアラウベシ。

走馬禁

右擎鷹走馬必致驚懼傷害之事有時而在凡厥掌飼不得輒然至于鷄子尤可慎之鷹ヲスエテ馬ヲハシラセバカナラズ鷹ヲドロキヲソレヤブラレカイス

ルコトアリ。鷹匠タヤスク馬ヲハスルコトヲエザレ。鷄ノ子ハモツトモツ、シムベシ。

穢器禁」(三二一ウ)

右飼養之道鮮潔為貴鹹臭之物必以傷鷹凡厥掌飼着酒氣鹽溫等之器不得穴養鷹ヲカイヤシナフノ道ハアサヤカニイサキヨキヲタツトブ。シハハユクサキモノハカナラズ鷹ヲソコナフ。酒氣塩氣アタ、カナル等ノ器ニイレテ肉ヲアタフベカラズ。

汗手禁

右汗膩之物理必傷鷹凡厥掌飼臨哺養時務崇洗手凡穢アブラツクモノハカナラズ鷹ヲソコナヒヤブルノ理アリ。鷹匠カヒヤシナフ時ハ崇テ手ヲアラウベシ。

飲酒禁」(三三オ)

右酒之為物毒熱大尤盛加以醪醕之徒手足顛倒如令其擎必傷害乎凡厥掌飼属淵醉時不得擎鷹

(※) 頭注に墨書で「必一本作如」と有り。

酒ハ毒熱モツトモサカンナルモノナリ。ソレノミナラズ酒ニ酔ヒタルトモガラハ手足モ顛倒ス。カクノコトキ人ヲシテ鷹ヲ擎シムシバカナラズ害アリ。鷹匠フカク酔ヘル時ハ鷹ヲスユ「ル」コトヲエザレトナリ。」(三三ウ)

新修鷹經卷之下

療治

陶弘景有言曰夫生民所為大患莫急乎疾疹疹而弗治猶救火不以水也人既如此物亦宜然至如鷹病未有前論後周魏收近而略述今又引而伸之別之于後凡目病者調養不精之所致也其候見以肩摩目閉睫目輪漸腫眼幕起出来漫瞳人即是也煮黃連以鳥羽塗肩及目有驗又研鹽和酢塗之此為劣耳又目翳採竜膽折之即汁出以塗之一方斬数蠅首以銅研伝之」(三四オ) 但未試也

梁ノ陶弘景イヘルコトアリ。人タル物ノ大ナル患ハ疾ヨリ急ナルハナ

シト。疾アリテ療治ヲ加ヘザルハ火ヲケスニ水ヲ用ヒザルカ如シ。イ  
 ユルノ理ナシトナリ。人スデニカクノゴトシ。鳥類モ又其ノ道理ナリ。  
 鷹ノ病ヲ療治スルコト上古ノ代ニハ病論モア「ラ」ザレトモ近代後周  
 ノ魏収大略ノベシルセ「リ」<sup>〔付箋〕</sup>。今又其ノ章ヲ引テコレヲ後段ニ品々シル  
 セリ。凡鷹ノ目ノ病ハ平生飼ヒ養フコトノアラキユヘ也。目ノアシキ  
 ヲウカ、ヒ見ルニハ肩ニテ目ヲスリ睫ヲトゾ目ブチ次第ニハレドニク  
 イテ瞳ヲスル様ニ見ユル類ナリ。黃連ヲ煎シテ鳥ノ羽ニテ鷹ノ肩ニヌ  
 レハ肩ニテ目スル度ニ藥ノ氣目ニ及テ快驗アリ。又ハシホヲスリ酢ニ  
 テトキテコレヲヌル。右ノ藥方ヨリハヲトレトス。又目カスムニハ  
 竜膽ヲトリテコレヲ折レハ「三四ウ」茎ヨリ汁出ツ。コレヲヌル。又  
 一ノ方ニ蠅ノアタマヲアマタキリアツメ銅ニテスリテコレヲツクトナ  
 リ。シカシナガラ此一ノ方ハイユル証拠ヲ見ズトナリ。

## 治鼻塞方

凡鼻欲塞時鳴声不美、驚竊之後急喘孔鳴、即捉偃臥以紙針着清胡麻油塗齶孔而  
 吸鼻孔令油氣徹一方、漱口含冷水正吹入鼻孔不可激散、以愈為限、但吹水用昏曉  
 時不用、昼時此為鷹習灑水恒畏人面也、一方可灸突金上額下毛際三炷、猶不愈者  
 夾灸兩目間廻毛三炷、又猶論其病重者目上及口中額下強腫即亦「三五オ」偃  
 鷹以刀針割出「口腫者割之後以鈎子落之也」其色赤白凝如熊脂「腎塞重者  
 有此候治与此同」

ヲヨソ鷹ノ鼻フサガラントスル時先鳴ク声ウルハシカラズ。トバヒシ  
 テ後ハ息急ニ鼻ノ孔ナル鷹ヲトラヘテフサシメ紙針ニテスミタル胡麻  
 ノ油ヲアギトノアナニヌリ鼻ノアナヲ吸ヒテ油ノ氣ヲトホラシム。又  
 一ノ方ニハ人先ツ口ヲス、ギヒヤ、カナル水ヲフクミテ真直ニ鷹ノ鼻  
 ニ吹き入ル。水ワキヘホトバシリチラザルヤウニナスヘシ。病ノ愈ル  
 ヲカギリニ幾度モ右ノ如クス。タビシ水ヲ吹クハ曉クラキ内ニナスベ  
 シ。昼ナスベカラズ。鷹水ヲ吹キノ、ガル、コトヲシリテ平生二人ノ  
 面ヲキラヒラソ「<sup>〔付箋〕</sup>」ル、癬ツクガユヘナリ。又一ノ方ニ突金ノ上額  
 ノ下ノ毛ギハニ灸スルコト三炷スベシ。猶イエザレバ兩ノ目ノ間廻毛」

「三五ウ」ヲハサミテ灸スルコト三炷。又其ノ病ヲモキ者ハ目ノ上口ノ  
 中額ノ下コハリ腫コトアリ。スナハチ鷹ヲフサシメ刀針ヲ以テサキイ  
 ダス。「口ノハル、ハサイテ後鈎子ニテカキヲトス也」其色赤ク白ク  
 熊ノ脂ノゴトシ。「腎ノ塞ルニモ此ノ症アリ。療治モコレニ同シ。」

## 治腎塞方

凡腎欲塞者雖常嗜食不夥而飽或不全食「終以致須臾不治也」拳尾屢揺其失  
 難放、頰毛寒豎目輪及腎眼間腫即偃鷹以紙針着清胡麻油塗孔亦伝鹽「其痛少  
 不可伝塩」然後能調餌与之及強遺失色如埴堅如石若猶不愈以犀角丸如豆糝  
 餌哺之為上治務候徹此治則得差若己長「三六オ」大雖勞無益

凡ソ鷹ノイザライ塞ントスルモノハ常ニ食ヲホカラザレトモアキ或ハ  
 全ク食セズ。カクノゴトキハシバシノ間ニ療治トゞカサルコトアリ。  
 尾ヲ拳テウゴカシ失ツキガタク類ノ毛寒タチ目ブチ腎ト眼ノ間ハル、  
 トキハ鷹ヲフサシメ紙針ニテスメル胡麻ノ油ヲ孔ニヌル。又塩ヲツク。  
 「痛少キハシホヲツケズ。」其後二餌ヲヨクト、ノヘコレヲアタヘヨ。  
 鷹シイテヲボヘズウチスル「コト」アルニウチノ色埴ノ如クカタキコ  
 ト石ノ如クニシテ猶イヘズンバ犀角丸ヲ豆ノ如クニシテ餌ニマセテコレ  
 ヲカフヲ第一ノ療治トス。ツトメテ此療治ノ方ニ通セハ平愈スルコト  
 ヲ得ン。モシスデニ病大イニナラバ心ヲ用ユルトモ益ナカラント也。

## 治脚腫方「三六ウ」

凡治脚腫者偃鷹以針周遍刺腫上偏悉出去滑液惡血等既燒銅針每孔二三刺之  
 猶不愈者久熟格上之所致也世号曰脚蚘但羅鷹病之猶希巢鷹稍多耳理須纏格  
 以柔悞物然後繫之「寒時用葦皮暖時用薦蓐也」又為脚繫所曳而腫者初兆時  
 研塩和酢塗之夕塗朝流不則鷹嚙脚為塩所傷

鷹ノ脚ノ腫タル治スルニハ鷹ヲフセ針ニテ腫ノ上ヲアマネクサシタハ  
 シル惡血ヲイダシ銅ノ針ヲヤキアナゴトニ二度三度ヅ、コレヲサス。  
 猶イヘザルコトハ格ノ上ニ久クツナガル、ユヘ也。世ニナヅケテ脚蚘  
 ト云フ。羅鷹ハ此病マレナリ。巢鷹ニハ此病多シ。格ニヤハ「三七オ」  
 ラカナル物ヲマトイテ鷹ヲツナグベシ。「寒キ時ハ葦ノ皮ヲ用ヒ暖ナル

時ハ鷹ヲ用イル類ナリ。」又ハ脚ヲ繫ニヒカレテ腫タルニハ初メ腫レノキザス時シホヲ酢ニトキテコレヲスル。今晚ヌリツケバ翌朝ハ洗ヒヲトス。シカラザレバ鷹アシヲカミテシホノ毒ニヤブラル、ナリ。

治脚疣方

凡治脚疣者鷹杏仁十枚研以絹袋伝之再三転易以愈為限

脚ノ疣ヲ治スルニハ杏仁十枚スリテ絹ニツ、ミスリツク。二三度ツケタルヲバ新シクトリカユ。疣愈マデツクル也。

治鷹腹股毛方」(三七ウ)

凡鷹腹毛者巴豆一枚中割取一片其三分胡麻油一合更復三即取其一和之乃以水銀如粟子三枚雜哺之鷹股毛者採葵莖陽乾燒成灰以湯淋之和雌黃及酢洗之雖旧説但未試耳

鷹腹ノ毛ヲカムニハ巴豆一粒ヲ半分ニワリカタミヲ三分ニシ胡麻ノ油一合ヲ三分ニワケ其ノ油ニ右巴豆ヲアワセ水カネヲ粟<sup>アツ</sup>三粒ホトマゼテコレヲカフ。股ノ毛ヲカムニハ沢葵<sup>ハサビ</sup>ノクキヲ日ニホシ灰ニヤキテ湯ニテツ、ギ雌黃ト酢トマゼテアラフ。是ハ古キ方ナレトモイマタ証拠ヲ見ズトナリ。

治鷹拔羽方」(三八オ)

凡治鷹羽者以熊膽苦茶研和塗之但未試也

鷹羽ネヲカミヌクニハ熊ノ膽<sup>キツサレ</sup>苦爪ヲスリマゼテコレヌル。シカシナガラ此方モイマダ証拠ヲ見ザルトナリ。

治療方

凡治療者鷹偃臥先以清水洗之以爪若竹筴搔膚上殆出血氣更以溫湯潔洗之而安水銀膏於掌上唾混雜以無名指摩塗之一方以酢研雌黃塗之其瘡或伝脚侵食見而不見此為易治或遍着身軀隨毛浮沈奔行速疾如散如集此為難治然務而治之必得疾復」(三八ウ) 隨而不勞終致指瘡

鷹ノカユガリヲ治スルニハ鷹ヲフセキヨキ水ニテ洗。アラフ人ノ爪ニテモ竹ノヘラニテモ鷹ノ膚ノ上ヲ血ノ氣<sup>ケ</sup>ノイヅルホドカキ其後アタ、カナル湯ニテイサギヨクアラヒ水銀膏ヲ手ノヒラニヲキ唾<sup>ツハ</sup>ニテトキマ

ゼ無名ノ指ニテコレヲスリスル。又一方ニ酢ニテ雄黃<sup>ヨ</sup>ヲトキ瘡<sup>カユカリ</sup>ノトロコニツク。或ハ脚ニツケテワレト脚ヲカムトキ自然ト鷹ノ口ニイル様ニナス。瘡ノトコロ見レトモ見ヘザルハ療治ナシヤスシ。或ハ鷹ノ惣身瘡ツキ毛ノウキシ□ミニシタガヒカユガリ惣身ニウツリメ<sup>付箋</sup>「クル」コトスミヤカニシテトコロヲサダメズチル如クアツマルガ如クナルヲ療治ナシガタシトス。此ノヤマヒヲ得ルトキ心ヲツケテ治セザレバツイニ鷹ノ指ヤスル也。」(三九オ)

治血痢方

凡此病者不知何等之所生也或曰熟肉与之故所致也今料量非唯闕此其為軀也俄頃逐衆鷹而轉移如疫病之行人<sup>一作問</sup>世也宜初兆徵此以時以生鳥營哺令肥「鷹者与雉鷄者与鶉雀也」但輕者得重者終死自之外未知所治

此ノ病ハ何故ニ生スルコトヲシラズ。或人ノ曰ク熟セル肉ヲアタフルユヘ也ト。今ハカリミルニ此ノミニアラズ。其ノ病軀ヲ見ルニシバシノ間ニ外ノ鷹ニウツルコト疫病ノ人間ニウツリメグルガコトシ。此病ハ兆初メニ生鳥<sup>キサス</sup>ヲイトナミカフテ肥ハシムベシ。鷹ニハ雉ヲアタフ。「鷄ニハ鶉雀ヲアタフ。」タゞシ病ノ輕キハ生重キハ終ニ死ス。是ヨリ外療治ヲシラズトナリ。」(三九ウ)

治被犬噬鷹執方

凡治者鷹先披露痕出去其中毛而燒泔牛鳥脂塗「鷹者用牛鷄脂鷄者用鷄脂」凡此病不早治則終致害也

是ヲ治スルニハ鷹ヲフセテ先カマレタル疵<sup>キズ</sup>ヲヒラキアラハシキズノ中ヘイリタル毛ヲ出シ去リテヤキ牛ト鳥ノ脂ヲカキタテ、ツケヌル。鷹ニハ牛ト雉ノアブラヲ用ユ。鷄ニハ鷄ノアブラヲ用ユ。此病早ク療治ヲ加ヘザレハツイニ害ヲイタス也。

治肉癰方

凡肉癰者調養不精之所致也其初兆時數振身或振中止或雖不振而慄乱毛斂毛如此無度眸子寂寥如」(四〇オ) 視遠物哺食日減軀以瘦瘠斷食即死也披見其害癰或腫着腹下或遍五臟中或五臟六腑悉乾枯或説腫着腹下者儻有治以刀子



披割以馬尾縫之但勿犯立死凡羅鷹之徒多得此病巢鷹之類遭之者希古往今来未知治方治之説請俟後哲

肉ノ癥ノ病ハ常ニト、ノヘ養フコトノクハシカラザルユヘ也。其ノ病初ノキザストキ度ミ身ヲフルヒ中ゴロハフルヒヤミ或ハフルハザレトモ噪<sup>サハ</sup>デ毛ヲミダシ毛ヲサマルコトサダマリナク眸子<sup>メジメ</sup>ウツトリトシテ遠キ物ヲ見ル如ク食日ミニ減シ次第ニヤセテ食ヲタチテ死ス。ヒライテ其ノ病ノ癥ヲ見レハ或ハ腫レ腹ノ下ニツキ或ハ五臟ノ中ニアマネク或ハ」(四〇ウ)五臟六腑コトミミクカワキカル。一説ニ腫レ腹ノ下ニツクハタマミミユルコトアリ。小刀ヲ以テハレタルトコロヲヒラキサキ馬ノ尾ニテコレヲ縫フ。ヤマヒナキ肉ヲカスコトナカレ。タチトコロニ死スルナリ。羅鷹ハ此病ヲ得ルコト多シ。巢鷹ハ此ノ病マレナリ。古ヨリ今マテ此療治ヲシラズ。ヨロシク後ノモノシル人ヲマツベシトナリ。

#### 治脚折傷方

凡脚折傷者削楊木編次繫着取銅屑糝餌哺之此未試也

鷹ノ脚クジケタルハ楊ノ木ヲケツリアミツナギツケ銅ノスリクヅヲ餌ニマセテコレヲカフ。イマダ証拠ヲコ、ロミズト也。」(四一オ)

#### 治内瘡方

凡内瘡者為犬所噬及溺水之所生也背而上領岐下左右凹處夾灸二炷一方灸腰日三炷一方二腋下五臟孔各灸三炷然後芒硝琥珀牛黃竜骨四種等分末屑以胡麻油和之如豆子以葦管入口爾後可<sup>二字以并疑論補之</sup>二辰哺食不早用哺食或短氣者灸頂上三炷斯皆旧説但未試也凡鷹孔方雖多不詳病治所適是故不得輒言灸艾子者使如小豆子但鵠者差減耳

内瘡ハ鷹犬ニカマレ或ハ木ニ突フレテ生スルナリ。背ヨリ上領<sup>クビ</sup>ノ下左右ノツボミタル処」(四一ウ)ヲハサミ灸スルコト二炷。又一ノ方ニ腰ニ灸「ス」<sup>(付)</sup>ルコト毎日三炷。又一ノ方ニ二ノ腋ノ下五臟ノ孔各灸スルコト三炷。其後芒硝琥珀牛黃竜骨四イロヲ等分二屑<sup>コマカ</sup>ニシ胡麻ノ油ニテトキ豆ホトニシテ葦ノ管<sup>クダ</sup>ニテ鷹ノ口ヘイル。其ノ後二時ハカリニシテ

食ヲカフヘシ。早ク食ヲカフベカラス。或ハ短氣ナラバイタゞキノ上<sup>ニ</sup>灸スルコト三炷。是ミナ古来ノ説ニテ試ミザルナリ。スベテ鷹ノ灸穴多シトイヘトモ病症ニカナフコト詳ナラス。コノユヘニタヤスク灸ノ療治ハイヒガタシトナリ。スベテ艾子<sup>モクサハアツキ</sup>小豆子ノ大サニスベシ。鵠ハ猶小サニナスベシトナリ。」(四二オ)

(白紙)「(四二ウ)

(道具図省略)「(四三オ)

(白紙)「(四三ウ)

(道具図省略)「(四四オ)

(灸穴図省略)「(四四ウ)

(灸穴図省略)「(四五オ)

(白紙)「(四五ウ)

弘仁九年五月二十二日

賜拳正從六位下行備前權掾勲六等巨勢朝臣馬垂

正七位上行令史兼美作大目上野公祖繼等

別当二品行式部卿親王

中納言兼左近衛大將從三位行春宮大夫陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣

參議左衛門督從四位下兼守右大弁行近江守良峰朝臣安世」(四六オ)

從四位下行越前守勲五等大野朝臣直雄

從四位下行美濃權守安部朝臣易繼

右兵衛督從四位下安部朝臣雄能磨

左近衛中將從四位下兼行左中弁越前權守<sup>白示久遠</sup>

新修鷹經上中下以類書及弁疑論再三遂校合了

(「昌平坂學問所」印)

(「文政庚寅」印)「(四六ウ)

#### 【付記】

前稿「『新修鷹経諺解』の翻刻と解題」(『八洲学園大学紀要』第七号)の  
翻刻において誤記・誤植があった。次の通り訂正する。

・七オ 《誤》「左ノカキツナラネシト云フ意ナリ。」

《正》「左ニカキツナラネシト云フ意ナリ。」

・四九ウ 《誤》「鷹ニ食セラル。鷹ニモアシキ故ナリ。」

《正》「鷹ニ食セラル鷹ニモアシキ故ナリ。」

・六七オ 《誤》「長サ一寸ナカホドヨリ」

《正》「長サ一寸。ナカホドヨリ」

(受理日：二〇一二年三月一六日)